

スクラップ

—あるベトナム帰還兵の手記—

スズキクニオ

夜が降りてくる。心が和む。

このまま、永遠に朝が来なければ良いのに。

何度思ったことか。

しかし、朝はまた確実にやって来る。

判決を下す、無慈悲な司法官のように……。

そして、地獄のような一日が、また始まる。

1

モリーと初めて会ったのは——一九七一年——沖縄のキャンプ瑞慶覧にある海軍病院であった。

私は治療の為沖縄に送還されていた。そしてその頃、私が送り込まれた病院には、二百人近いベトナムからの帰還兵がいた。その中にモリーがいたのだ。

負傷兵に混じって女がいる、ということ自体がふさわしくなかった。噂はすぐ私にも伝わってきた。

モリーはハイスクールを卒業して看護学校に入り、国際志願奉仕団から、クアンガイ省の難民救済所に派遣されていたのだという。当然志願でなければベトナムに派遣されるはずはない。そのことが私の興味をひいた。むしろ他の負傷兵たちも同じことではある。モリーは病院におけるスター的な存在だった。右目をいつも包帯で巻いた痛々しさが、ますます負傷兵

の感傷をさそっていた。

右目の包帯にまつわる噂はこうであった。モリーの派遣された難民救済所では慢性的に医療品が不足していた。見かねたモリーは近くの米軍の施設に駆け込み、不足の医療品の懇願をしていた。ところが折り悪くその日は解放軍による猛攻撃があり、モリーは逃れる間もなく敵の銃弾に右目を撃ち抜かれた。

真偽はわからない。いささかセンチメンタルに過ぎていた。しかしその当時、私がそれを鵜呑みにしたのも当然であった。私はうす汚れた動物臭いベトナムの女ばかりを目にしてきた。白い肌に対する鼻膺の目もあって、私はモリーの逸話を信じたかったのだ。

私とモリーが親密になったのは、私が軍医助手をしていたということ、そしてモリーが看護学校を出ていたという経歴である。親しく会話を交すようになり始めた頃の二人は、共に顔の半分に包帯を巻いていた。私たち

はいつもお互いの顔の半分を見つめ合っていた。そしてそのことが、後々にはお互いを惹きつけた最大の要因であることに気がつくのだが。

私はベトナムに二年いた。しかし病院に勤務していたのはクアングアイ省にいた最初の一年だけで、その後はユエの陣地突出部で戦闘に明け暮れた。ユエの第一歩兵師団で、私はただの一人の負傷兵も治療したことはなかった。かわりに多くのベトナム人を射殺した。そのあげく敵に右頬を撃ち抜かれ、瀕死の解放軍兵士に、ナイフで右太股を切り裂かれた。

モリーはいつも気弱に、私の顔色を窺いながら、途切れ途切れに話した。「私はたくさんさんの難民を見てきたわ。……戦争はいけないと思う。罪のない人まで……農業や漁業に携わる人、子育てに専念しなければならぬ女の人、ようやく学校に通い始めた子どもたち……みんな戦争は殺してしまうの」

けれども、私はそんなベトナム人たちを、容赦なく撃ち殺してきていた。

モリーと知り合って直ぐの頃、私はモリーに私のしてきたことを話そうかと思った。そして、そう思うと、告白せずにはいられなくなった。なるべく感情を入れず、ありのまま伝えようと努力した。ところが、話すうちに多少の皮肉が入り交じってきた。モリーが難民救済の為にベトナムにいたということが脳裏をかすめたからだ。それでもモリーは私の話すことを善意に解釈していたようだった。つまり、懺悔として。モリーは私を真っ直ぐに見つめ返しながら頷き、しばしば、「あなたのせいではありません」と尼僧のように繰り返した。

そんな折、私は信じられない思いがして、微かにモリーを疑った。モリーもベトナムにいたのだ。帰還兵がそこで何をしてきたか知っている筈であった。いや実際に見てきた筈だった。しかし、私は何かを見失っていたのかもしれない、と思い直してみた。というのも、そう信じたかったからなのだろう。ともかく、此処はもうベトナムではないのだ。故郷のアリゾナの空に似た、澄んだ色をした沖繩の空の下である。何を警戒している

のだ、此処にはもう私を狙う敵は一人もないのだ。そう思うと私の皮肉な頑い心は、無警戒に、しだいに和らぐように力を失った。

風のゆるやかな晴れた日に、私たちは時々屋上に昇った。青と翠の海の境目に、白いしぶきを上げている暗礁を眺めながら、私たちは男女間特有のいたわり、お互いのやさしい触手を交し合った。

そしてモリーと出合ってひと月が過ぎると、私はモリーに親しみ以上の感情を抱くようになっていた。モリーはそんな私の腕の中で彼女の未来をさえ語るようになった。私たちが心の中にお互いを決めていくにしても、けっして早急ではない、とその時私は確信していた。それほど私たちはベトナムの戦場で傷ついている筈であった。しかし今はもうアメリカに戻ったのだ、と私は思った。再び天国に還ったのだ、と。だが、私の結論は短絡すぎた。いや、むしろ逆でさえあった。私の苦痛は、それから始まったのだから。

沖縄に来て三ヶ月が過ぎると、私の足はもうほとんど治り、びっこをひきながらも散歩ぐらいは出来るようになっていた。ところが、顔の傷は奇異な程治癒が遅れた。時々鏡の前で包帯を外す時、その傷は、私が撃ち抜いたベトナム人たちの、怨念のように貼りついていて、私はゾツとして包帯を巻き直した。

そうして包帯の外れた日、私たちはお互いの顔に愕然とした。モリーの右目はこめかみのあたりまで黒い空洞のように映った。その部分だけが長い間に埋もれていたかのように黒ずみ、皮膚の破れ目からは赤い肉が絹糸のようにのぞいていた。私の左頬は瞼の下から顎にかけて、ウニの肉に似た橙色に爛れている……。

私たちは軍医の計らいでカテナの宿舎に移った。しかし、知り合った頃の快活な生活はすでになかった。沈黙が始終影のようにつきまとい、私たちの視線はいつも臆げに宙に浮いた。決してお互いの瞳の中を探ろうとはしなかったのだ。そこには底のない深い闇が潜んでいるような気がした。

休日の午後、私はしばしばモリーを誘って恩納の砂浜に寝そべった。三つの瞳は空の深い彼方へと向けられた。私たちの瞳が同一方向に向けられている時、私はほっと安堵のため息をついた。私の横で仰向けになって横になっているモリーの顔の輪郭は、夕闇の中でしつとりと安らかに息づいているのだろう。それはベトナムで解放軍の襲撃に遭う前、彼女の持っていた容貌と自負を窺わせるものに違いない。そんな時、塩を含んだ夜風が私たちにも平等のやすらぎを与えてくれるような気がした。

(このまま、永遠に朝が来なければ良いのに……)

モリーの肉のうすい華奢な手を握ると、その手は力なく毀れそうに軋んだ。

モリーと暮らし始めて間もない頃、アメリカ帰還の通知が来た。私はモリーに彼女の要望を訊ねてみた。モリーは帰りたくないと言った。

「こんな醜い顔、誰にも見せられない」

それは私も同様だった。ともかく家族や友人たちにだけは見せたくない

と思っていた。私はそのまま病院に軍医助手として勤務することを申し出た。私の申し出は即座に受理された。軍としても負傷した顔でアメリカに帰還されたら困るのだろう。ベトナムでの戦闘は、まだ激しく続いていたのだ。

モリーはいつも人目を避け、宿舎に閉じ籠もってばかりいた。だが、私は仕事上多くの人間と対峙しなければならなかった。その誰もが気の毒そうに伏目がちに私を見ていた。

それから半年が過ぎ、一年が経ち、日を追うごとにモリーの傷は治癒していった。眼球は潰れているにせよ、瞼やこめかみのあたりにしだいに正常な皮膚の色つやが蘇ってきた。それに伴い、長い間暗い犬小屋同然だった私たちの部屋に、女の棲むらしい明るい雰囲気立ち籠めてきた。コーナーに一輪ざしが置かれ、リビングには花柄の付いたレースのカーテンが引かれた。

モリーはすすんで外出をし、隣人たちとの会話にも立ち入るようになっていった。さらに、看護師として病院に勤務することを申し出た。人手の少ない折である、モリーの希望は当然のように受理された。もちろん、眼帯の装着は必須として義務づけられたのだが……。しかし、私の傷は一向に快方に向かわなかった。それはいつまでも生々しく爛れて残った。

そしてカデナの宿舎に移って二年目に入った頃、モリーの態度に変化が生まれた。と同時に、私とモリーの間奇妙なよそよそしさが生じてきた。それはかつて明るい照明の下で抱いた不安とは異質のものだった。モリーにはもう以前の身を焦がすような不安はなかったのだ。そしてそのことが、私のモリーに対する信頼を、わずかずつ食い破っていった。

さらに日が経つと、モリーの目に新しい我が閃くようになった。それは時折、背筋を凍らす程に鋭く冷たく光った。モリーのそんな変化に私は重苦しい憂鬱を感じていた。それは予感と言っても良かったのかもしれない。そうしてモリーの目に宿った我は日毎に膨れ、いつからかごつごつと固い

しこりとなり、しだいに鈍器のように私の心を撲つようになった。

そんなある日、モリーが病院に勤め始めて半年程たった頃、その日私たちは共に休日であったのだが、モリーがとりわけ弾んだ様子でサンドイッチをバスケットに詰めていた。ビーチに行こうとしているのだった。

その当時、嫌な噂が私の耳に届いていた。モリーが特殊部隊のトマソンという男と親しくしているという噂であった。ビーチで二人が、まるで恋人同士みたいに肩を寄せ合っていたというのだ。その日モリーがうきうきしていたのも、もしかしたらそのせいかもしれない、と私は疑った。私は水を差したくなった。

「人間の生理つてのは怖いよ」

私は初めてそのことを口にした。別にモリーと議論を交すつもりなどなかった。ただモリーにビーチに行つてほしくなかったのだ。モリーはしばし沈黙していた。そして思い切つたように口を開いた。

「なぜ生理がいけないの？みんな自分の生理があるんじゃない」

「それが罪を生むんだよ。人間の善も悪も、結局は生理が支配しているんだからね」

愛さえも、とつい口がすべりそうになった。

私はモリーの反応に注意した。モリーの動作がひどくのろくなった。バスケットに詰めているポテトが急に不味く感じた。モリーはバスケットの一点を見つめ、ゆっくりとポテトを詰めている。もうポテトは見えていない。そして、その時、私は執拗だった。今まで閉じ込めていた感情が、堰を切つたように溢れ出た。

「たとえばだよ、道を歩いている時、向こうから醜い程太った女が来たとする。君は何を感じる？その女に」

モリーの手の動きが止まり、二人の間に緊張が生まれた。そして、私はそれを好んだ。

「デブと不快な感情を持つだろう」

「……………」

「しかし、デブと軽蔑したことに対しては何の罪も感じないんだ」

「それは…………その人が不快だったりしたらよ」

「でも、デブは不快なんだろう」

「それは…………相手にもよるわ」

モリーの返答はしだいに弱々しくなった。私は成功したように思った。モリーを引き摺り込み、再び二人の絆を堅固にしよう。それが私の思惑だった。

「じゃあ、痩せた人間のそういった感情はどうなんだ？つまり、優越感を持って肥満した人間を軽蔑するって訳だ」

「軽蔑って訳じゃないけど」

「軽蔑さ！」

私は傲然と言つてのけた。すると、急にモリーの態度が変わった。ふつと顔を上げ、真正面から私を見据えた。そして、まるでそれでお話はお終

いといった風に、バチンとバスケットに蓋をした。

「私行くわよ。あなたも行くんだったら、早くして」

モリーはそう言つて冷蔵庫から水筒を取り出した。先刻作っていたレモネードだ。

「僕にも一杯くれないかな、少しのどが渴いた」

ことさら二人の関係を位置づけようと、私は言った。わずかにモリーの手の動きが止まり、ちらつと横目で私を睨んだ。その時、私はたぶん懇願するような目の色をしたのだ。モリーはめんど臭そうにグラスに一杯注いで私にくれた。

氷のいっぱい詰まったレモネードは、飛びきりだった。それがついトマソンの満足げな微笑みを思い浮かべさせた。一瞬、私もモリーに従いて行くかと考えた。だが、そんな勇氣などありそうになかった。正午の太陽の照りつけるビーチに、こんな傷痕を晒す気には到底なれない。しかもトマソンがいるのだ。惨めになるのはわかりきっていた。

「植物園に行こうか、モリー」

そう私は提案してみた。バスケットを片手に持ち、大きなサングラスを掛けて、モリーはもう扉口に立っていた。

「そう、だったら私誰かの車に乗せてもらうから、あなた、一人で行ってらっしゃい」

モリーはそう言って微笑んだ。サングラスの奥の目の色はわからない。ガチャッとドアが開き、そして閉じ、モリーの姿はドアの向こうに遮られた。

ドアの外から、モリーの大きなため息が聞こえてくるような気がした。

「手も足もない赤ちゃん、って知ってるかい」

「テレビドラマで見たことあるわ」

その日、珍しくモリーは外出もせず、休日を私と共に過ごしていた。それでも口数は少なく、マフラーか何かを編んでいる。

沖縄でマフラーなんか必要ないだろう、と私は思った。しかし何か訳がありそうなので黙って見ていた。もしや、と不審に思った。だが、やはり問い質すことは出来ない。もしそうだとすれば、モリーは面と向かって私を侮辱していることになる。今までモリーだけは私に対してそんな態度を見せたことはない。

私は昨日同僚のハートが言った言葉を再び噛みしめてみた。

「明日ホワイトビーチで特殊訓練がある。トマソンも駆り出された。……明日しかないぜ、モリーと縊を戻すんならな」

ハートはニヤニヤしながら私の顔を窺っていた。

「植物人間っていうか、奇形児っていうか、まあ、そんな赤ちゃん、君は看病出来るかい」

「何の話？」

モリーは素っ気なく返した。きつとトマソンのことを考えていたのだ。このマフラーだっけると……。

むらむらと込み上げてくる怒りを抑えて、私はなおも続けた。

「実際いるんだよね、そういう赤ちゃんの看護婦が」

「どういふこと？」

モリーは編物の手を休めて、私を見た。

「そういう看護婦たちがだよ、そりゃあすべすべした赤ちゃんのうちはいいよ、でも、もし五十年も六十年も生き延びて、そうして体中皺くちやになつたとしたら、彼女たちは看病出来るだろうか、つまり奇形の上に老いて醜い訳だよ」

私が言い終えると、モリーはまじまじと私の顔を見た。私はモリーの返答を待った。モリーは黙って私を見ていた。しばし、沈黙が訪れた。

と、瞬間鋭い悪寒が体中を駆け抜けた。

(モリーは私の爛れた傷痕を見ている)

私は全身が震えた。咄嗟に、殺意に似た何かが閃いた。

モリーはふっと目を逸らし、再び編物を続けている。

ガタン、と椅子を引き私が立ち上がると、モリーの両手がぴくりと動いた。モリーは身構えながら凝つと気配を窺い、さらに編物を続けている。

私は寝室に入った。入るとすぐにベッドに俯せになった。ひどい徒労を感じていた。体中が憤怒の熱で火照っている。心臓の動悸がどんとどんと太鼓の音のように響き、恰も頭蓋骨を叩き毀しにかかっているかのようにだった。

リビングは物音一つしなかった。モリーが何を考え、何を望んでいるのか、もう私には想像すら出来なかった。だが、モリーがすでに私と同じ感覚でないことだけは確かだった。私は独り取り残されていた。

「私、アメリカに帰るわ」

朝、病院に向かう車の中だった。

「いきなりどうしたんだ？あれ程帰りたくないって、撥ねつけてきたのに」
モリーは無表情に前を見ていた。いつもと何の変わりもないモリーの横顔だった。ベトナムで負傷した傷は、もう殆ど癒えていた。眼帯さえ装着

すれば、何ら同世代の若い女性たちと変わるところがない。

「私でも欲しいって言ってくれてるの」

普段と同様、まるで花にでも話しかけるみたいに落ち着いていた。

「もういいわね、知ってるでしょ、彼のこと」

「キャンプ中の噂だからね」

私はつい意地の悪い口調になった。

「ふん。彼、来月アメリカに送還されるの。私、彼に従って行くわ」

トマソンが演習中誤って右足を撃ち抜き、病院に担ぎ込まれたのは、一昨日のことだった。手術はスチュアート軍医が執刀した。私は助手としてその側についた。トマソンの苦痛に歪む表情に、一種爽快な小気味良さを味わいながら、額に浮かぶ脂を憎々しく思っていた。

ところが、手術が済むと、

「成功だ」

軍医はトマソンの耳元で囁いたのだ。トマソンは疲労に青ざめた顔を引

き攣らせて、ニヤリと笑った。私はハッと気がついた。もしかしてトマソンはわざと……。私は軍医の前に進み出た。軍医はじろりと大きな目で私を見据え、

「お前は引っ込んでろ」

温厚で通っている軍医が、かつて聞いたこともないような憎悪に満ちた口調でそう言った――。

「彼と約束したの」

モリーの態度はやはり穏やかだった。

「まるで他人みたいな言い方だね」

私が返すと、モリーの表情が急に強張った。そして蔑むように私を睨んだ。その顔はまさに他人のものだった。

「私、簡単に生きたいのよ。あなたみたいにいつも陰気なの、私かなわないわ。ごちゃごちゃした生き方は、もう嫌なのよ」

モリーは苛立たしそうに叫んだ。

私はかろうじて言い返すことが出来た。

「前の君は、そうは言わなかったよ」

車は駐車場に入った。病室の窓から、トマソンが身を乗り出すようにして手を振っていた。モリーは車から降りると、トマソンに向かって大きく頷き返した。

その日からモリーは帰って来なかった。病棟ですれ違う時にも素知らぬ風に通り過ぎた。そして、なぜかいつも軍医の目が私に注がれているような気がした。

『モリーは帰してやれ』

軍医の目はそう語りかけていた。私にはそれ以上突き進むことが出来なかった。ベトナムで負傷した傷が、その頃、さらにひどくなっていくように私には思えた。

「ごめんなさい」

モリーとトマソンがアメリカへ帰国する日の朝、私が病院に着くと、モリーは待っていたように病舎から飛び出してきた。二人だけで会話を交すのは、モリーが宿舎を去ってから初めてのことだった。

「わかってるよ、もう三年以上も前のことなのに、僕の傷はひどくなるばかりだ。誰だって嫌になるさ」

「私だって右目が潰れているのよ」

モリーは微かに右目を庇うしぐさをした。私はそのしぐさに故意を感じた。

「君の目はすでに乾いている。治ったんだよ君は！」

荒々しく私は叫んだ。

「そうだろう、そうなんだろう、だから嫌になったんだろう？」

モリーはなおも沈黙していた。私はモリーに少し恨みを晴らしたくなった。私は自虐ぎみに言った。

「君はいつだって僕に抱かれる時、目を堅く閉じていたね。でも、時折君

がうすく目を開く時、僕がどんな気持ちになって君を抱いたか、君はわかっていたんだよ」

私が言い終えると、モリーの手は固く握られ、小刻みに震えた。だが、愚かにも私はその手の震えを誤解した。その時、モリーと私を繋ぐ糸がまだ切れていないものと思ひ込んだ。

「言ってくれ、はつきりと。いいんだよもう、どうせ僕は今でも片端さ」

私がそう続けた時、モリーは俯いていた顔を上げ、真正面から私を見据えた。その瞬間、私は誤解に気がついた。

モリーの口元がわずかに引き攣っていた。それから、奇妙に歪みながら、ゆっくりと開いた。

「あなたよりは、よっぽど生理的なのよ、女は！」

2

ギャルソンが『サテイスファクション』の重いイントロを口ずさんでいた。クリスがその後を陽気に続けている。

“I can't get no satisfaction”

私は憂鬱な気分で草色の輸送機を見ていた。

(こいつら、帰国してうまくやって行けるのだろうか)

輸送機の不気味なグリーンがベトナムでの記憶を蘇らせた。

ベトナムは半年前に終結していた。丁度、モリーがアメリカに帰国してすぐ後だった。トマソンの故意の事故が追及を受けなかったのも、ベトナムが和平に急速に傾いていたからかもしれない。

(それも計算づくでやったのだろうか)

ちらとモリーの賢そうな顔が浮かんだ。

“I can't get no satisfaction”

戦場で覚えた歌を、ギャルソンとクリスが燥きながら繰り返している。

“満足できない、満足できない”

私も知らず知らず胸の内では唱えていた。

「おいカール、どうして帰国しないんだ？」

ギヤルソンが私に問い掛けてきた。

私は空の深い青と輸送機の暗い草色の対比を不自然だと思って眺めていた。それ程これらの空の怪物たちはベトナムのジャングルに似合っていたのだ。

(滑走路のせいかもしれない)

白い一本のレールのような滑走路。その傍らに沿うように続く、まるで安全信号のように美しく刈られた緑の芝生……。

「あまり気にすんなよ」

クリスの投げつけるような言葉が私の思考を遮った。

私は視線を落とした。アスファルトが反射する光が急に熱く感じた。

「モリーのことには忘れるよ。アメリカに帰ったら、若い娘たちが手を広げて待ってるぜ」

ギヤルソンが私の帰国を促すようにして、穏やかに言った。

「沖繩にも結構いるけどな、股広げてるのが」

クリスがそう引き継いで、下品に嗤う。

私は急に居ずらなくなった。顔が強張るのが自分でもはっきりとわかった。

「元気では、うまくやれよ」

踵を返して、私は二人と別れようとした。すると、ギヤルソンが思いもかけないことを口走った。

「モリーを撃ったのは、俺だよ」

一瞬、何のことかわからなかった。ギヤルソンは繰り返した。

「モリーを撃ったのはベトナム人じゃない、俺だ！」

クリスが傍らでクツクツと笑っている。

「モリーに口止めされていたんだよ。クリスも知ってる」

私はギヤルソンを見た。しかしギヤルソンは真顔で続けた。

「警戒行動中、森の中を走ってる奴がいた。俺はてっきりベトナムだと思っ

て撃った。森の中で動く奴は、皆敵だからな。ところが、そいつがヘルプって叫んだんだ。驚いて近づくと、血まみれの女がしがみついていた。それがモリーだよ。モリーは難民救済所から逃げて来たんだ」

ギャルソンが言い終えるのを待って、私は片手を挙げて二人と別れた。「ちえつ、馬鹿野郎！いつまで気にしてんだい」

クリスの吐き捨てるような言い草が私の背中を追ってきた。ギャルソンの告げた言葉が、徐々に私の理性を毀し始めていくような気がした。

休日には暑過ぎる日だった。私は車のドアを開け、風通しを良くして輸送機の飛び立つのを待った。

やがて輸送機がゆっくりと動き始めた。そして原始の獰猛な怪鳥そのものの不気味さで、滑走路を飛び立った。

半年前、モリーとトマソンが同じ輸送機でアメリカに向かつて飛んで行った。その時と同じコース、同じカーブを描いてギャルソンたちを乗せた怪物が

本国へと飛び去って行く。

機体は徐々に小さくなり、軽い微かなエンジン音が耳に残った。そして、先刻からの憂鬱がしだいに腹に立て籠り、底なしの脱力感へとずれていった。

と、背後から馴染みの太い声がした。

「カール、ビーチにでも行こうや」

振り向くと、スチュアート軍医が海水パンツからはみ出た赤らんだ巨体を揺らしながらウインクしていた。その後には夫人と助手のハートがいる。

「今日はドライブです」

私は軽く一礼をして、無難にやり過ごそうとした。

軍医は愛想のいい微笑みを浮かべて手を振って通り過ぎた。だが、少し離れると、ハートの低い嘲るような声が背中に突き刺さってきた。

「ま、あれ以上焼くこともないか」

下卑た嗤いがそれに続く。夫人がそれを窺っている。

私は背中を鋭利なナイフで抉られたような痛みを覚えた。戦場での傷痕が、しだいにピリピリと熱を帯びてきた。

「おいカール」

またしても呼び止められた。トカゲのような色つやをした黒い指がぬつとフロントガラスに張り付き、ジョーンズの顔がのぞいた。

「ビーチにでも行こうや」

「今日はドライブだ」

「へっ、このくそ暑いのに。カリフォルニアにでも行くつもりかい」

私は車にキーを入れた。

「ビーチじゃ、可愛い娘たちがたくさん待ってるぜ。まるで、小魚みたいにピチピチしてよ」

キーを回すと、カーラジオから軍放送のけだるいカントリーが流れてきた。ことさら間のびしたステイールギターがのどかに平和を歌っている、

それに健康そうな女性のボーカルが重なる。

女は男の瞳でわかる

見つめ合う時 初めてわかる

愛があるかどうか

包帯が外れた日から、モリーと私は見つめ合うことを止めた。それを恐れた。私たちはお互いの傷を見ぬことで安らぎを得ようとしていた。

そうあなたの瞳の中にいる時

私はやすらぎを得る

そして いつも美しい

バチンと私はラジオのスイッチを切った。抑えようもない凶暴な感情が

首をもたげ始めていた。

私はアクセルを思い切り踏み込んだ。

「それにしても、カールの悄気た顔は、いつ見ても最高だぜ！」

ジョーンズが賛嘆するように声を張り上げている。私はクラッチをゆるめ車を発進させた。

「ヘビーバーンのミチコが、カールに会いたがってたぜ。カールの顔が、可愛いんだってさ」

ジョーンズの愉快そうな叫び声が追ってくる。ミラーを覗くと、それと知ったジョーンズが、ディスコの軽快なステップを踏んだ。

夕刻、太陽が赤くなっていた。だが、光はまだ槍のように鋭い。やはり休日には暑すぎる日だった。車窓から刺す光が、容赦なく私の傷痕を撲つ。ぷつぷつと後悔が泡立つ。私は底なしの沼へと墜ちてゆく。

ビーチ入口の停留所に女が待っていた。酒場の女だ。

「遅いわ、わたしもう三十分以上も立っていたのよ」

「乗れよ」

「馬鹿……。でも、今日はわたし泊まれないわよ。近ごろママがうるさいの」

言いながら、女が私の腕に絡みついてくる。粘るような不快感と、どつしりと腰を据えたような安堵感が私を満たす。やがて、全ての思考が欲望の為だけに蠢き始める。

——狂暴な欲望が、赤黒い膿のような欲望が、加速度をつけ、たった一つの存在のてっぺんで爆発する。私の膿んだ水晶の体液は地中深くへと吸い込まれていく。私は空白になる。そして、はつきりと何かに繋がれている己れを確認する。地球の核にある何か。愛欲という名の極彩色。私は一匹の精虫にすぎない——。

牡と牝の中和した精液が、行為の後の滓となって下腹部に貼り付いている。海風がしっとりとその部分に馴染む。草むらから這い上がってきた小

さな虫が、ゆっくりと尻から背へと動いてゆく。じりじりとした感触がある。

月が海の上で橙色に空に焼き付いている。腐ったオレンジの匂いが思考に満ちてくる。

「海で流してこいよ」

「嫌よ、だって人が来るもの」

唇を尖らせながら、女が服を着け始める。女の体重に挫けていた草たちが、ゆっくりと起き上がってくる。さっきの虫が肩まで這い上がってきた。右手を肩にあて、ゆっくりとこする。手のひらに黒い滓が付着した。私は海へと走る。橙色の月が凝つと私を見つめている。その月が、巨大な塊となって私の思考にのしかかってきた……。

暗い道をヘッドライトがくすぐる。不安がよぎる。漆黒の闇夜が暗示でもするように前途を塞いでいる。

私はこの女を信じてはいない。というよりも、むしろ私は全ての女を信

じてはいない。女は柔かい体のどこかに冷たい我を隠し持っている。それは言葉、アクセント、目の色、艶などとは裏腹の、真綿でくるんだナイフ、とでも思える女の生理なのではないだろうか。それは決して罪ではない。罪ではないが、しかし……。

（心は生理の奴隷にすぎない）

ビーチ入口の停留所が近づいてきた。女が左足に絡み付いてくる。粘りつくような酸っぱい体臭がより濃くなってくる。振り払いたい衝動に筋肉が硬直する。

（お前など肉体だけだ。アメリカの女に比べれば、お前など……）

嫌悪が速度に速度を加える。体液に似た後悔が、私に寄り添う女の体温に溢れる。

「わたし、今日は店に出なくてもいい」

「構わないから出勤しろ！」

「いいのよ、ママはわかってくれると思うの」

「いいから行け！」

「どうしたの？」

「嫌なんだ！早くどこかに消えてくれ！」

急に光を滅した街道が、緩いカーブを描いて丘の向こうまで続いている。女はいない。穿き慣れた靴を穿くような安堵感がある。私は独りだ。

生理が停止し、焦れるような摩擦は消えた。

私はしだいに暗い海の底に棲む海草になる。快い海の振動に身を委ね、ゆらゆらと揺られながら、何千年も前の遠い祖先のことなどを考えている。及ばぬ思考が推理をよいロマンティックに色づけする。そして自分がなぜ存在するのかを知る。遠い未来の、ロマンティックな彩色の為に私は在る。私は夢見る。未来の人々が夢想する、私のロマンティックな現在。空想は色鮮やかな無限の宇宙全てに変貌していく。地へ繋がる根を断ち切り、羽根のように空に飛び立つ。一枚の羽毛のような私の存在。ふわふわと宇宙を流れ、いつか無窮の時になる……。

と、背中でざらりと何かにこすられる。生理がビクリと起き上がる。私は暗い海の淵へと引き摺り込まれる。地の底の軟弱な無数の微生物たちが、足元からぞろりと這い上がってくる。やがて手も足も口も、髪の毛の中まで、微生物がびっしりと貼り付いてくる。悪寒が走る。生理が狂ったように体中を駆け巡る。息が苦しい。私の存在など無視したかのように生理が叫び続ける。

「なんだこいつらは、おい、お前！なんとかしろ！おい、早くどうにかしろ！……ああ、嫌だ、ああ、嫌だ……アア……アア……アア……」

後悔が、ビーチ入口の停留所で待っていた女が、安手の野卑な陶器となつてビビ割れる。そしてビビ割れた裂け目が囓う。

「やっと夢から醒めたのかい。随分わたしをコケにしてくれたけど、どんな片端だってあなたの焼け爛れた顔を見たら逃げちまうさ。生理？フン、いい加減なあてこすりはよしなよ。その傷がどんなに偉い勲章だって、醜いことには変わらないからね」

戦場では私を特別視し差別する人間は一人もいなかった。私はごくありきたりの兵士にすぎなかった。ベトナム人でさえ私を敵として憎み恐れていた。私は群れの中の一人の人間として自らを疑うことはなかった。ベトナムから帰還した兵士たちの多くは、戦場は地獄だったと吐き捨てるように言うかもしれない。だが私は一年も二年もの間、ベトナムを地獄だとは自由にしたのだ。全ての罪は大目にみられ、罰せられたのは、殺したくないという感情ぐらいのもんだった。それがあつた時、天国と思えたとしても、何の不思議もなかったのだ。

そうして、私は帰還した。しかし私はカデナの基地において、もはや群れの中の一人ではなかった。顔の傷が刻印のように私を集団からはみ出させ、私は人影に隠れるようにして集団の中に紛れ込もうとした。だが傷痕はすぐに見出され、人々の生理を掻きむしった。偽善と優越と嘲笑がいつも執拗に周囲につきまとい、サッカーボールのように私の自尊心を蹴飛ば

してしまった。私は破れたサッカーボールとなってグラウンドに取り残された。時折拾い上げる人々は、しげしげと傷口を眺め、繕い、また思い切り蹴り上げるのが常だった。そしてそれらの人間たちは、ごくありきたりの、朝顔を洗うのが当然といったような、何げない涼しい顔をしていたのだ。確信する。彼らにはそれが、つまり私にとって凶暴とも思える生理的感情表現が、ごく当たり前のことであつたのだ。

私にとってベトナムからの帰還は、予想していたよりも遙かに急激な下降を意味していた。欲求不満はしだいに増した。歯を噛むような情念にも似た憎悪の蓄積。金縛りのような感情表現の不自由――

「ベトナムよりも、今の方が地獄だな」

「それでもないわ」

「どうして？」

「ベトナムでのあなたたちの発散なんて、たかが知れてたんじゃないの」

「此処は可能性があるって訳か」

「そうよ。ベトナムじゃあせいぜい優秀な殺人マシーンで、その報酬が勲章ってところよ」

「一体……何が言いたいんだ？」

「あまり自分だけ悲しまないでよ。負傷兵じゃなくたって、普通の人間にだってそのくらいの悲しみはあるわ」

「そのくらいって……」

「あなた身勝手に思い過ぎる。他人のことも知らないで、自分勝手に思い込み過ぎる。他人の苦しみまでわかってあげようとはしていない。それであなたの苦しさを訴えたって、誰も理解してくれる訳ないでしょ」

「つまり君のことも含めてか」

「どうしてそう振れてるの。私そんなことを言ってるんじゃないわ。私あなたに立ち直ってほしいから言ってるのよ。どうしてわがらうとしないのよ」

「君変わったね」

「あなたもよ」

「初めて会った頃の君はそうじゃなかった」

「私、もう無意味に塞ぎ込むのは嫌なのよ。私、単純に生きたいの。だから努力してるんだわ」

「無意味に塞ぎ込むだの、単純に生きたいだの、よく平気で言えるよ。君だけ治ったからって、そんな言い方はないだろう、モリー。僕にしたって、君にしたって、精一杯生きてきたんじゃないのか——」

私は時折ベトナムへ帰りたいと思った。だが、どこかで躓いた。モリーがいたからだろう。そのうちベトナムは終結した。そうして私は後悔し始めた。なぜベトナムへ戻らなかったのかと後悔し始めた。それからの私はあらぬ空想に耽り始めた。再び世界中が戦場に陥れば良いと思った。人間が皆私と同じ刻印を押されれば良いとさえ思った。また同じ結果を導く、偶然や天災の訪れることを夢想した。しかし、それはすぐには訪れそうになかった。そして私はまた殺人やリンチに飢え始めた。私は怒りのままに

人間を成敗したかった。ベトナムではそれは日常だった。しかし、カデナ基地での生活は私にとって決して日常にはなりえなかった。それはあまりにも不自由過ぎていた。

基地の入口が見えてきた。ゲートボックスの小さな灯りが見えている。基地内は黒い闇に蔽われている。もしも、この入口がなかったなら。そしてベトナムなど存在しなかったのなら、私はアメリカで順調なコースを歩んでいたのかもしれない。やり場のない怒りが込み上げてきた。私はゲートボックスに車ごろ突っ込もうかと思った。だが、アクセルに力を加えようとして、ためらった。それはあまりに無意味なことだった。私はブレーキを踏んでUターンした。行き先などなかった。しかし、このままガードに身分証明を出し、爛れた傷痕を照明の下に晒す気にはなれなかった。私は再び車を海へと向かわせた。

……恩納の海が、黒いなめらかな振動を繰り返していた。黒牛の腹

のように、臓腑の意志を秘めながら、静かに息づいている。数えきれない程の命がこの波打際の彼方にある。が、そう思うと、それらの命に対する憎々しい憤りが込み上げてくる。しかし、海は泰然として私の思惑をはねつける。私の無力に対する嘲りを、この海までもが執拗に繰り返している……。

その時、ヘッドライトの光の中に、一つの動体が見えた。私はアクセルに力を加えた。四十マイル、五十マイル、そして計器が六十マイルを計示した時、自転車に乗った若い女の顔が振り向いた。その顔がみるみる恐怖の色に歪んだ。

不意に、ベトナム以来忘れていた、ある快感が蘇った。それは私にとって、実に懐かしい顔だった。私はその顔に吸い込まれるようにして、アクセルを踏んだ――。

その瞬間、軽い昇天するような感覚が全身を捉えた。痺れるような愉悦が全身を貫いた――。

終わりに

事故の直後、私はアメリカへと送還された。

裁判は無罪だった。無灯火の自転車側に過失があったのだ。だが、その代償に、私は社会からも抹殺された。今はカナダとの国境で、独り狩りをして暮らしを立てている。もちろん、親兄弟とも絶縁状態だ。

けれども、これで良かった。もはや、私には何も望むことはない。今後、社会とも関わることもないだろう。孤独は清潔だ。孤独こそが私の朋友だった。そして、自然は限りなく優しい。私を責めることも、悔ることもしない。

いつかその日が訪れたら、私は誰に知られることもなく、その懐に還るだろう。静かに、乾いた心と自由を片手に、おおらかな大地に還るのだ。そのことが、人間として淋しいことだとは、決して思わない。

(了)